

妙見信仰と真武信仰における文化交渉

二階堂 善 弘

Cultural Interaction Between the Japanese *Myōken* Belief and Chinese *Zhenwu* Worship

NIKAIDO Yoshihiro

Seen from the perspective of cultural interaction, Myōken was originally the representative deity of esoteric Buddhism; however, it is believed that under the influence of multiple gods, this deity underwent a change. For example, Zhenwu, as the god Zhenzhai Lingfu, blended and fused with Myōken. Because of this syncretism, a Zhenwu-type Myōken appears in figures, such as the Chiba Myōken. In other examples, however, Myōken assumes a form close to the Daishōgun, and a number of diverse images have been preserved. This diversity of the Myōken god suggests that it should be considered a composite of multiple gods.

キーワード：妙見、真武、道教、密教、神道

1. 妙見神と真武・玄天上帝

日本で広く信仰されている妙見神は、また「妙見菩薩」「妙見尊星王」「北辰妙見菩薩」といった称号を持っている。さらに「鎮宅靈符神」と同一神であり、また日本の原初の神の一つ「天之御中主神」であるともされる¹⁾。

日本で妙見神を祀る神社や寺院は数多く存在する。有名なものには大阪の能勢妙見、熊本の八代妙見、福島^{あめのみなかぬしのかみ}の相馬妙見があり、また千葉の千葉妙見神社、大阪の星田妙見宮^{おんじょうじ みいでら}などもある。園城寺（三井寺）などに妙見像があることも知られている。

しかし一方で、妙見神は真武大帝（玄天上帝）と同じ神であるともされる。その姿は冠を被らずに披髪（ざんばら髪）であり、裸足で手に剣を持つものがよく知られている。真武大帝は四霊の玄武から発展した神であり、亀と蛇を足の下に踏みつけている場合が多い。

いま妙見神の姿として、『千葉妙見大縁起絵巻』に見られるものを見てみると、亀と蛇（玄武）に乗り、頭髪をざんばら髪にしており、確かに真武大帝と共通するところが多い。一方で異なる所もある。例えば、

1) 吉岡義豊「妙見信仰と道教の真武神」（『智山学報』第14号1966年）104～105頁。



千葉妙見神社



『千葉妙見大縁起絵巻』の妙見神²⁾



武当山太和宮玄天上帝像

一般的に真武大帝は裸足であり、また北方の象徴である黒い衣服を着ていることが多い。しかしこの妙見神は靴を履いており、かつ白い装束をまとっている。ただ、明らかに両者の間に影響関係があることは看取できるであろう。実のところ、妙見神の信仰は時代によってかなり変化しており、またその像容も一定しない。この『千葉妙見大縁起絵巻』の像も、あくまで多くの妙見神像の中の一つに過ぎない。

2. 妙見神像の変遷

このような妙見神の複雑な背景については、吉岡義豊氏がすでに詳細な検討を加えている。その指摘によれば、妙見に関して早期の資料と思われるのは、密教経典の一つである『七仏八菩薩諸説大陀羅尼

2) 『千葉妙見大縁起絵巻』(坂尾山栄福寺所蔵・千葉市郷土博物館1995年) 45頁。

神呪経』である³⁾。そこでは次のように述べられている。

われ北辰菩薩は名を妙見という。いま説かんとするところの神呪はもろもろの国土を護持する。所作するところはなほだ奇特なるがゆえに「妙見」と呼ぶのである。この閻浮提にあり、衆星中の最勝であり、神仙中の優れた仙であり、菩薩の大將である。

また妙見神については江戸期に流行した沢了の『鎮宅靈符縁起集説』の記載に拠ることが多いようである⁴⁾。

抑、北辰尊星と申奉るは、天すでに開闢して円なる物現ず。其中に一点の神御座ます。神道には是を国常立尊と申奉る。此一点の御神、すなはち天の御あるじにて北辰尊星と号す。此一点の御星また陰陽を産給ふ、日月是れなり。この星又五を生じて、五星と化し五行と成る。是を神道には地神五代と申す。五行生じて人間生じ、この星又七を生じ七星と成り玉ふ。

この『鎮宅靈符縁起集説』などの記載に基づき、吉岡氏は妙見信仰について、次のように箇条書きにまとめている⁵⁾。

- (一) 国常立尊は北辰尊星である。北辰尊星は鎮宅靈符であって、これは漢孝文帝のとき弘農県劉進平が伝えたものである。
- (二) 日本伝来は推古帝のときであって、肥後八代郡白木山神宮寺が初伝の地である。この神宮寺の靈符尊像が妙見菩薩である。ここに天平十二年と正平六年の靈符板がある。神宮寺は上中下の三宮よりなつて上宮の妙見本地は大日如来で、七体妙見<釈迦、弥陀、観音、地藏、金剛蔵王、虚空蔵、大威徳>が安置されている。
- (三) 七仏所説神呪経によると、北辰菩薩は妙見であって、消災、降敵等の靈験がある。また摩醯首羅、俱生神、三宝荒神に変身し、上元太乙神ともなる。太乙神は宋天禧二年（1018）に「真武」の号を加賜せられた。天にあっては北斗尊星であり、また玄武ともいい、亀蛇のすがたでもあらわれる。
- (四) 家相上もっともいみきらう三愚の宅も鎮宅靈符神を奉祀すれば転禍為福して福相となる。＜このあとに鎮宅七十二靈符神といわれる七十二種の靈符を説く＞

このように、北辰尊星、国常立尊、真武大帝、鎮宅靈符神と著しく混淆し、すでに神道の神なのか、密

3) 『大正大藏経』第21冊所収。

原文：我北辰菩薩名曰妙見、今欲説神呪擁護諸国土。所作甚奇特故名曰妙見、處於閻浮提、衆星中最勝、神仙中之仙、菩薩之大將。

4) 早川純三郎編『信仰叢書』（八幡書店復刻版2000年）336頁。なお一部表記を改めている。

5) 前掲吉岡義豊「妙見信仰と道教の真武神」104頁。

教の菩薩なのか、道教の神仙なのかも判然としない。さらに中国においてはほとんど妙見信仰が発展しなかったため、日本における独自の神格という形になってしまった。このように中国の道教や民間信仰の神々は、日本においては全く別個の神として信仰が展開する場合がよく見受けられる。

もとより妙見神の姿は一定していない。林温氏は次のように指摘する⁶⁾。

妙見すなわち北辰を祭ることは、延暦十五年三月に始まるといい（『公事根源』）、三月三日と九月九日の二度、内裏より北方にある適当な霊場で北辰に燈を献じ、天皇が北方に向かって遙拝する。北方の霊場としては天台宗の寺院が選ばれ、貞観頃（859-876）以来、一時月林寺や円城寺に遷ったが、霊巖寺で行われることがふつうであった。（略）等身の木彫像で吉祥天に似た、すなわち左手は心臓のあたりで如意宝を持ち、右手は与願印という姿だった。したがって、今日吉祥天像として扱われている仏像の中に、本来妙見像として造像されたものが混じている可能性がある。（略）円仁に遅れて入唐した、もう一人の天台密教の祖師である智証大師円珍は、中国において師事した青龍寺法全から付与された両界曼荼羅と尊星王菩薩像一軀を、中院に安置したという（『寺門伝記補録』八）。尊星王は先述したように妙見菩薩の別名であり、北辰すなわち北極星を神格化したものである。（略）残念ながら院政期に少なからず制作された尊星王像は伝わらず、現在園城寺に所蔵される尊星王像は鎌倉時代にさほどさかのほらない時期の作である。（略）基本的には二臂の菩薩形でさまざまな持物を持つ形と、四臂で龍のうえに立つ姿の二種に分類できるが、後者は尊星王像とほぼ等しく、また後世における明星天子像の祖形となったかとも思われる。

ここで言及されている尊星王の姿は、よく知られているように四手で日月を手執り、龍に乗る菩薩形の像である。時に三面である場合もある。

真武神は、北方守護の玄武がその姿を変えたものであるが、唐の時期においては、まだその人格神化はほとんど行われておらず、披髪に裸足の像も五代から宋以後に発展したものである。平安期に妙見の像がある場合は、当然それは真武神の影響は受けていないものと考えられる。すなわち、当初は真武信仰と全く関わらない形で妙見信仰が存在していたのである。

むろん真武大帝は北方守護の役割を担っており、さらに星神であるという特色もあり、妙見と性格が非常に近い。宋代から明代に真武信仰が盛んになっていくにつれ、徐々に日本においても影響を与えていったものと考えられる。

その点で重要なのは、むしろ鎮宅霊符神の方である。幾つかの図像を見ても、妙見神よりも鎮宅霊符神の方がより真武大帝に近



三室戸寺の尊星王図像⁷⁾

6) 林温「妙見菩薩」（『妙見菩薩と星曼荼羅』『日本の美術』No.377 至文堂1997年）47～50頁。

7) 『国宝三井寺展』図録（2008年）97頁。室町時代の作、三室戸寺の蔵。

い形をしている。この問題については、山極哲平氏が詳細な討論を行っている⁸⁾。

この像は、披髪に裸足、前に亀と蛇の玄武がおり、また黒い服を着けていることから、明確に真武大帝の像であると思なすことができる。恐らくその基づいた図は、真武大帝を描いたものであったろう。それが日本では「鎮宅霊符神」として描かれているわけである。山極氏も論じているように、まず真武と鎮宅霊符の習合があり、その後それが妙見神に影響を及ぼしたと考えられる。その意味では「妙見神イコール真武大帝」とは言えない面がある。



三井寺の鎮宅霊符神図像⁹⁾

3. 妙見神と大將軍・太歳

妙見神は、神社では妙見神・鎮宅霊符神として、寺院では妙見菩薩として現在でも日本の至るところで祭祀されている。

よく知られているのは、熊本八代の妙見宮、それに大阪能勢の能勢妙見山である。能勢妙見山は、鳥居があるが、日蓮宗に属す仏教の霊場である。

この能勢妙見の霊符に描かれた妙見像を見てみると、また四手にて龍に乗る密教形妙見とも、真武形の妙見とも異なる姿をしている。

一般に、この形の甲冑を着けた武神形の妙見像も多く存在する。先に見た千葉妙見の姿は、この武神

8) 山極哲平『鎮宅霊符神の誕生と展開』（関西大学文学研究科修士論文）2009年。

9) 前掲『国宝三井寺展』157頁。室町時代作。



能勢妙見山



能勢妙見の霊符に描かれる妙見像

形と真武形を折衷したような形をしていると考えられる。

この像は、妙見神というよりは、むしろ大將軍神に似ている。大將軍とは、これも星神であるが、一般に牛頭天王の八王子の一つとされる。

有名な『簠簋内伝』の冒頭には、牛頭天王と蘇民将来の話が記されるが、その中には、次のような記載がある¹⁰⁾。

牛頭天王八王子等。其八王子者、太歳、大將軍、太陰、歳刑、歳破、歳殺、黄幡、豹尾等也。



京都大將軍神社の大將軍神

10) 『簠簋内伝』については、中村璋八『日本陰陽道書の研究』（汲古書院1985年）、及び深沢徹編『日本古典偽書叢刊』第3巻（現代思潮社2004年）のものを参照した。ここは『日本陰陽道書の研究』251頁より。

八王子とは、すなわち日本の陰陽道で重視される八将神、太歳神・大將軍・太陰神・歳刑神・歳破神・歳殺神・黄幡神・豹尾神を指す。このうち、黄幡・豹尾神の両神については、『道法会元』『北遊記』などの記載から、どちらかと言えば太歳の配下の神であることが分かる。

ただ、日本の大將軍神の像容も定まらない。武神形のものもあれば、童子形のものもある。それはむしろ八王子神のいずれかの像なのかもしれないが、その混淆の様相はさらに複雑である。むしろ妙見神も大將軍神も、星の神ということでは共通する面がある。このため、何らかの形でその像容が影響を与えた可能性がある。

ところで、日本では太歳信仰はそれほど発展せず、むしろ大將軍の方が目立つようになっている。

「太歳」という語は、現代の中国においてもよい印象を持たない言葉であると言われる。よく使われることわざに「^{タイソエトウシャントントウ}太歳頭上動土」というものがあるが、「よりによって」「火薬庫のそばで火遊び」といった意味を持つ。恐ろしい太歳の上でなんと愚かなことをするかということで、つまり太歳神は凶神に類する神格なのである。特に宋代以降は、凶神・疫神の代名詞とも言えるほどのものとなっている。

朝鮮や韓国においては、魔除けの標識として使われる「大將軍」がある。これは「チャンスン（장승）」と呼ばれるもので、漢字にては「長性」「長生」とも書かれ、韓国の村の入口や寺院の門に立てられるものである¹¹⁾。

もっとも、チャンスンの中には「唐將軍」「周將軍」と書かれるものもあり、これは明確に「唐・葛・周」三將軍に由来するものであるため、太歳や大將軍のみと結びつけてよいかどうかの問題はある。

葛・唐・周三將軍については、『三教搜神大全』の卷二に「呉客三真君」として記載がある¹²⁾。



ソウル民俗博物館のチャンスン



ソウル民俗博物館の「上元周將軍」チャンスン

11) 任東權著・竹田旦訳『大將軍信仰の研究』（第一書房2001年）4～17頁参照。

12) 前掲『絵図三教源流搜神大全』103～104頁。

原文：昔周厲王有三諫官、唐・葛・周也。（略）三官諫曰、先王以仁義守国、以道德化民。（略）屢諫弗聽、三官棄職、南游於呉、呉王大悦。（略）後知厲王薨、宣王立、復歸周国。（略）三官既昇加封侯号、唐宏、字文明、孚靈侯。葛雍、字文度、威靈侯。周斌、字文剛、浹靈侯。宋祥符元年、真宗東封岱嶽、至天門、忽見三仙自空下。帝敬問之、三仙曰、奏天命運衛玉駕。帝封三仙曰、上元道化真君、中元護正真君、下元定志真君。



『三教搜神大全』より呉客三真君 すなわち唐葛周三將軍

昔、周の厲王には三名の諫官があった。これが唐・葛・周の三官である。(略) 三官は諫めて言う。「先王は仁義をもって国を守り、道徳をもって民を教化しました。」(略) このようにしばしば諫めたにもかかわらず、厲王は全く聞き入れない。そこで三官は職を棄て、南の呉の地へと向かった、呉王は彼らを迎えて大いに悦んだ。(略) 後に厲王が薨じ、宣王が即位したと聞いて、三官は周国に戻った。(略) 三官は功績により、封号を与えられることになった。すなわち、唐宏、字文明、は孚靈侯となり、葛雍、字文度は、威靈侯となり、周斌、字文剛は、浹靈侯となった。宋の大中祥符元年、真宗は泰山に封禪の儀を行った。泰山の天門に至ると、そこに三名の仙人が空より下ってきた。真宗皇帝が恭しくこれに問うたところ、三仙は、「天命を奉じて玉駕を護衛しております」と答えた。真宗は彼ら三名を、それぞれ「上元道化真君・中元護正真君・下元定志真君」に封じた。

すなわちこれによれば、「呉に客となった」から「呉客」と称していると考えられる。

この三將軍については、『道法会元』をはじめとする多くの道教經典において記載がある。例えば、『道法会元』巻百八十一「上清五元玉冊九靈飛歩章奏秘法」には、天門を守護する三將軍として、上元將軍唐宏・中元將軍葛雍・下元將軍周武の名が見えている。金允中の『上清靈宝大法』¹³⁾には、北極四聖など一部を除いて、元帥神に関する記載がほとんど無い一方で、この「三元唐葛周三將軍」については記載がある。恐らく道教の神將としては、元帥神よりも来歴の古いものであり、オーソドックスな神將であると言える。

しかし呂宗力氏らの指摘によれば、この三將軍は、宋代において既にその名は不明となっており、僅かに姓のみが知られるだけであった。そして元明の間に、周の厲王の臣下であるとの伝承が附会された

13) 金允中編『上清靈宝大法』(『正統道蔵』正一部S.N.1223)

とする¹⁴⁾。むろん『三教搜神大全』のこの記事は『搜神広記』を引き継いだだけものであるから、その元代の故事が反映されているものと考えられる。また三將軍は数多くの廟宇があったとされるが、後の通俗文学などの作品にはほとんど登場しない。

4. 妙見神と三宝荒神

もっとも、日本の妙見信仰の祭祀は、各神が複合しているというより、独立した信仰が併存する形がむしろ行われている。例えば、大阪星田の妙見宮では「妙見大神」「鎮宅靈符」「三宝荒神」の三種の神を併祀する形を取る。各神の祠もそれぞれ別になっている。



大阪星田妙見宮

このように、妙見神は鎮宅靈符神のほか、三宝荒神とも関連づけられることが多い。しかしながら、三宝荒神と妙見では、かなりその性質は異なっていると考えられる。『望月仏教大辞典』の記載によれば、三宝荒神は仏經に所伝無しとされる¹⁵⁾。

又三方荒神に作り、或は三宝大荒神と称し、単に荒神とも名づく。本邦修験道及び日蓮宗等に於て祭祀する神なり。案ずるに荒神は仏經の中には其の本説なく、亦其の所伝も区々として一定する所なきが如し。

もともと修験道の役行者と縁の深い神で、その姿は宝冠を被り六臂、独鈷・蓮華・宝塔・鈴・宝珠などを持つとされる。宮家準氏によれば、修験者の祭祀する神の一つに荒神がある¹⁶⁾。

14) 前掲呂宗力・樊保群『中国民間諸神』689頁。

15) 望月信亨『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会）第2巻1653～1654頁、「三宝荒神」の項目。

16) 宮家準「修験道と道教」（野口鐵郎・中村璋八編『選集道教と日本』第2巻「古代文化の展開と道教」雄山閣1997年）298頁。



信貴山の符に描かれる三宝荒神像

里修験は地域の人々の宗教生活に密接にとけこんでいたこともあって、彼らの宗教上の問に答えたり、その要請に応じて祭り、験術、呪法などを行った。これらの中には、道教との関連が認められるものも少なくない。まず神格に関する説明を見ると総じて神は聡明かつ正直で真を賞で、偽を罰する。(略) 神の中では月の晦日の夜天に昇って人の罪状を告げる竈神である三宝荒神 (略)、天の司命に人の悪事を告げる庚申 (略) が特に道教にかかわるものである。

すなわち三宝荒神は竈神として扱われており、むしろ火の神であるとされる。北方水の神の真武神とは逆の性質であるが、この点はほとんど注意されていないようだ。

5. 妙見神と琳聖太子

妙見神については、百済の王子とされる^{りんしょうたいし}琳聖太子に絡む説話も伝えられている¹⁷⁾。

昔人王百六代後奈良院の御宇に鎮西の探題大内多々良朝臣二位兵部卿義隆といえる人あり、その先祖は百済国の聖明王第三の王子琳聖太子とぞ称しぬ。時に推古天皇三年乙卯の九月十八日に周防国都濃郡鷺頭庄青柳の浦に忽然として天より赫赫たる大星降りて松樹の上に留り、七日七夜光明を放ち玉ふ事満月の如し。国中の諸民大に驚き奇異の思ひを為す所に、忽ち巫人に託して宣く、我は是北辰妙見尊星なり、今より後三年して三月二日に百済国の琳聖太子此国に来るべし、此事を聖徳太

17) 前掲早川純三郎編『信仰叢書』453頁。なお一部表記を改めている。

子に告て彼琳聖を此国に留むべしと告玉ふ。依て此旨を京師に奏聞しぬ。推古天皇甚だ悦ばせ玉ひ、同五年三月二日卿相雲客百余人を周防の多々良の浜に着玉ふ時に、琳聖太子龍頭鷁首の船に乗て多々良の浜に着玉ふ。即長門国大内の県に宮殿を構へて是に居しめ玉ふ。是に依て琳聖太子即鷲頭山に宮殿を造立ありて、北辰妙見尊星王を勧請し、星の宮と称して祭祀の日を九月十八日と定め玉ふ。

すなわち、百済国の琳聖太子が日本に来るに当たって、北辰妙見のお告げがあった。その言の通りに琳聖太子は来日し、その後周防において妙見神を祀ったとされる。さらに琳聖太子の子孫は大内氏であるとも述べる。

現在も山口の興隆寺にその跡が残っており、大内氏が妙見を尊崇したのは間違いない。ただ、この話自体は全くの伝承であり、さらに琳聖太子の渡来についても、史実に依拠すべきものはない¹⁸⁾。聖徳太子に謁した百済の王子阿佐をもって比定する説もあるが、これもほとんど論ずるに足らないものである¹⁹⁾。とはいえ、九州・中国地方においては妙見神と琳聖太子の結びつきは欠かせないものとなっている。

琳聖太子は熊本八代に來たとする伝承もある。現在でも熊本の八代妙見神社は妙見神を祀り、またその隣の鎮宅靈符社には琳聖太子を祀る。すなわち、ここでは鎮宅靈符神は琳聖太子そのものであると見なされている。

この琳聖太子の説話は、或いは真武大帝の伝説を模して作られたものではないかと考えられる。その説話は「真武大帝（玄天上帝）は、三月三日に生まれた浄楽国の太子であったが、王位を継がずに武当山に入り、修道すること四十二年にして白日昇天し、玄天上帝の位を与えられた」というものである。「ある国の太子が位を棄てて他国に行き、そこで神となる」という点は、真武大帝と琳聖太子において共通する。鎮宅靈符神と見なされた真武の伝承が日本に伝わり、それが朝鮮・中国との関係を重視した大内氏によって利用されたものではないだろうか。



八代妙見神社

18) この件については、中西用康『妙見信仰の史的考察』（相模書房2008年）172～190頁において論じられている。

19) 前掲早川純三郎編『信仰叢書』453頁。

6. 真武と妙見神に見られる文化交渉

文化交渉的な面から見れば、妙見はもともと密教の一神格であったものが、様々な神の影響を受けて変容していったものであると考えられる。

一方で真武大帝は鎮宅靈符神として、妙見神の信仰に被さる形で融合していった。そのため千葉妙見の姿に見られるような「真武型の妙見神」というものも現れるようになった。しかし他では、妙見は大將軍神の姿に近いものもあり、多様な姿は現在でも保たれている。その意味では妙見神は、様々な神格が合わさった複合的な神と考えるべきである。

また形象の面以外では、真武は妙見神にそれほど影響を与えていないものと考えられる。妙見神は真武とは別個の神と見なした方が自然であると思われる。むしろ鎮宅靈符神の方が、真武大帝と非常に近い神であると言えよう。